岡山大学算数・数学教育学会誌
『パピルス』第13号（2006年）83頁～97頁

「不耕起栽培」が教えてくれる教育（その３）

岡山理科大学
洲脇　史朗

学力問題で揺らぐ教育界を立て直し、地に着いた教育をするためには、確かな「教育理念」が必要である。それも欧米の単なるまねごとではなく、日本の文化を基盤としたものでなければならない。その教育理念の１つとして、本物の稲作「不耕起栽培」をもとに構築した「不耕起教育」を提言してきた。

今回はその中から幼児教育に絞って考察する。事例として取り上げたのは、千葉県の木更津社会館保育園であり、ここには３０年前に日本のどこにでもいた子ども達が、さらにバージョンアップして遊んでいた。

１．はじめに

かつては「学力」から「ゆとり」へ、そして今また「ゆとり」から「学力」へと教育界は方針を大きく転換してきた。スローガンも「生きる力」から「人間力」へと変わろうとしているが、要は「独り立ちできる人間」の育成を、子どもに「まかせる」部分と教師が「させる」部分のどちらに重点を置くかの問題である。

教育界は、何度も「まかせる」と「させる」の一方に偏っては失敗し、他方に偏っては失敗してきた。大部分の子どもは「まかせる」ばかりだと怠けてしまうし、「させる」ばかりだと拒否反応を示す。これが机上の理想論ではなく、現場の経験則である。

しかし４，５歳児のように、「まかせる」といくらでも工夫して遊ぶ時期があるし、小学校前期のように、「させる」ことに比較的従順で、知識吸収に熱心な時期もある。

要は「まかせる」と「させる」はどちらも大切であり、それぞれの時期に適したバランスで与えてやることである。そして、高校卒業までに「独り立ちできる人間」にしてやればよいのである。

また、教育はその国の文化に根ざしたものでなければならない。欧米（個人主義の狩猟民族）の教育は、根本的には日本（集団主義の農耕民族）の教育になじまないのである。日本は急速に欧米化したとはいえ、延々と受け継いできた農耕文化のＤＮＡは我々日本人の中にすり込まれている。一見して日本人らしからぬ若者の中にもそのＤＮＡは受け継がれている。

個人と集団もどちらか一方ではなく、ともに大切であることは分かり切っている。しかしどちらに基盤をおくかが文化の違いである。個人の成長で集団を高めるのが欧米文化であり、集団を高めて個人を成長させるのが日本の文化である。この文化を無視して、日本で個人を優先することは、わがままな子どもを育てることに他ならないし、昨今の教育現場の混乱はまさにこの現象である。

だとしたら日本は、欧米のまねごとではなく、日本の文化に根ざした、日本独自の教育理念を構築しなければならないのは当然である。

このように見てくると日本文化の礎である農耕、特に稲作は日本の教育理念構築に重要な示唆を与えるはずである。また直接的にも、稲作自体が子どもの成長に良い影響を与えて

いる事例も多い。そして、本物の稲作である「不耕起栽培」をもとに構築したのが、「不耕起教育」である。

「不耕起教育」は、最終的には「手取り足取りしない（耕さない）ことで子ども達を強くする。」という教育であるが、その目標達成を高校卒業時と定め、「その目標を達成するために、それぞれの時期にさせておくべき教育をしかっりさせておこう。」という教育である。そして、今私が取り組んでいるテーマが「それぞれの時期にさせておくべき教育とは何か」ということである。

2．前回までのまとめ

（その１）では、新しい教育理念である「不耕起教育」について、（その２）ではそれをより実践的にした「半不耕起教育」について述べた。その概略は次のようなものである。

（1）「不耕起教育」

冷害に強い稲作を目指していた稲作研究家の岩澤氏は、冷害で大部分の稲が実をつけなかった年に東北地方を訪問し、畦に近い稲だけが実をつけていることを発見した。畦の近くは耕耘機の歯が入らず耕せていないことから岩澤氏は、「稲は、耕していない堅い田んぼに植えることで、冷害に強くなるのではないか。」というヒントを得た。その後の研究で、稲は堅い田んぼに根を張る時に野生化し、冷害や病害虫に強くなることが判明した。岩澤氏はこの耕さない農法を「不耕起栽培」と名付けた。

しかし意図的に、耕していない堅い田んぼに通常の苗を植えてみると、根は十分に張らず収穫が半減した。通常の苗では堅い田んぼに打ち勝てなかったのである。しかし岩澤氏は、稚苗の時には低温を保って徒長を押さえながら水を限界まで我慢させるなどして、成苗の時にも引き続いて徒長を押さえながら寒風にさらすなどして、苗を鍛えることで堅い田んぼに根を張らすことに成功した。

この「強い苗を作り、そして耕さない堅い田んぼで稲を野生化させる不耕起栽培」は、人間の教育にも多くの示唆を与えてくれる。私はこの示唆に基づいて、平成１６年に新しい教育理念である「不耕起教育」を構築した。その骨子は次のようなものである。

小学校入学まで（稚苗）は、その前期に欲望を我慢させるしつけを愛情を持って行い、後期に早期教育（徒長）を控えて生きるための体力や社会性などの基礎的資質をしっかりと育成する。

小学校（成苗）では、その前期にやや強制力を伴って基礎学力や基礎体力を育成し、後期に個を尊重しながら望ましい生活習慣の確立を図って、中学校以降の手取り足取りしない厳しい場（耕さない田んぼ）に根を張れるだけの強い子どもを育成する。

中学校１年は、たとえいやがっても、生徒達を強引に堅い田んぼへ移植する田植えの時期である。

中学２年以降は、時には叱咤激励しながら、時には辛抱強く見守りながら、予習や課題を中心とした「自分でやれ」という厳しい教育の場にしっかりと根を張らせていく。

こうして、堅い田んぼに根を張った子どもたちは野生化し、予測できない冷害や病害虫に強いたくましい成人へと成長していく。

次に、「不耕起栽培」と「不耕起教育」の対比を示しておく。

不耕起栽培：発芽から特徴	不耕起教育:年齢校種
稚苗の完成まで：20日 水のがまんと徒長防止	6歳まで 保育・幼稚園
成苗の完成まで：40日 寒風やローラで鍛える	12歳まで 小１～６

田植え：40日頃 固い田んぼに移植	13歳頃 中1
分けつ完成まで：60日 根を張り茎を増やす	18歳まで 中2～高3
繁茂の完成まで：100日 勢いよく茂る	30歳まで 社会で活躍する
稲刈りまで：180日	55歳まで
古株以降：180日以降 生態系を豊かにする	56歳以降 後輩を育てる

（2）「半不耕起教育」

しかし、家庭環境や教育環境が激変した今、多くの中学校は過剰に手取り足取りされてきた子ども達を受け入れるのが現状である。この現状をふまえて、より実践的な「半不耕起教育」を平成１７年に提言した。

このもとになったのは「半不耕起栽培」である。稲作でも苗を鍛え損なうことはよくある。そのとき、田んぼの表面を浅く（5 cmほど）耕すことで、根の一部は耕した柔らかい層へ伸びることから、ひ弱な苗でも成長できる。そして５ｃｍより深い堅い層へも根を張ることから野生化もする。

ただしそこには大きな条件がある。田植えの際、5 cmよりも深い堅い層にも達するように移植しなければならないということである。それよりも浅いと、根は横着をして柔らかい層に広がるばかりで、下の堅い層には突き進まない。このため野生化しないどころか、実りの秋には実の重さに耐えきれず倒伏する。

教育の場合も同様で、弱さを補うための手取り足取りする柔らかい層と、野生化させるための堅い層の両方を用意しただけでは、子ども達は堅い層には根を張らない。最初から多少強引であっても堅い層にも植え付けておかなければならないのである。

つまり、「この部分だけはゆずらないよ。自分たちでやりなさい。」という強制が必要である。そこまでしないのなら、深く耕して多量の農薬を散布さえすれば？　耕したところまでは根を張り病害虫も近寄らず、とりあえず収穫できるのだから、今までの手取り足取り教育の方が安心である。

3.「稚苗の完成」と「家庭，保育園，幼稚園教育」

今回は、この小学校入学までの教育についてのみ考察していく。

（1）育苗と教育

種籾が発芽してから稚苗が完成するまでの約20日間は、人生の６歳までに当たり、生まれてから小学校へ入学するまでの期間である。

育苗ではこの前期に、水をぎりぎりまで我慢させる経験をさせておかないと、根が弱くなるだけでなく水をほしがる体質になり、将来の浪費家につながる。暑い夏の夜、浪費家の稲は体温を下げるために蒸散を盛んにして、体や実になる大切な養分を消費してしまうのである。

また、この後期に高温にしすぎると、第２葉が異常徒長して胚乳の養分を奪ってしまい、最も大切で今後の基礎となる第３葉の展開が遅れる。低温を保ってじっくりと第３葉を育成することが大切である。

これを人間の教育に当てはめると、この前期は、欲望を我慢させるといったしつけが特に大切であることを示している。やりたいようにさせることはとても幸せなように思えるが、自分の欲望を抑制し我慢をするといった経験が乏しいと、攻撃的になったり、成長するに従って内側からむしばまれていく。

また、この後期に過度の支援（高温）で早期教育や英才教育を行うと、そちらにエネルギーを奪われて、基礎的な資質の育成に支障

をきたすことを示している。ゆったりとした時間や自然の中でのびのびと、仕掛けはしても支援を控えて、将来のための基礎的な体力，言語，思考，社会性などをじっくりと育成することが大切である。

（2）早期英才教育の自粛

現在、英語教育を中心とした、あまりにも早期の教育が流行しているが、これら早期教育の加熱が子どもの成長に悪影響を及ぼすことを不耕起栽培は警告している。

2004年7月11日の朝日新聞朝刊に、ニューヨークで邦人のための「子どもの国幼稚園」を運営する早津邑子園長の次のような記事が掲載された。

「言葉の確立は母国語の習得が重要であり、母国語が確立しない間に、別の言葉が入ってくると思考に異常をきたす。」

早津氏が1974年に渡米したとき、家ではおしゃべりなのに幼稚園では一言もしゃべらない少女や、大きな声で泣けない子、言葉が出ず体をたたいてしまう子などがたくさんおり、現地の園でのびのび遊ぶ日本の子どもはほとんどいなかったという。異文化に突然放り込まれた子どもの不安を痛々しく感じた。早津氏は翌年「母国語でのびのび遊べる場を」とクイーンズ地区に日本語の幼児教室を開いた。これが「子どもの国幼稚園」の前身となり、それから30年、現地で幼児教育に携わってきた。

同園から現地の小学校に進んだ子は初めこそ苦労するが、1年もすると、最初から現地の園に通っていた日本人の子どもより高い能力を発揮する。その理由を早津氏は、「分かる言葉で育ってきた子どもは、分からない言葉に敏感です。分からない言葉の中で育った子どもは聞き流す癖が付いてしまう。」と説明する。さらに「母国語で深く考えることが、知識を広げることや自分を表現することにつながります。英語はブームのようですが、立ち止まって考えてほしい。言葉は手段であって目的ではありません。」などと指摘する。

幼児も4歳～6歳にかけて無理に背伸びをさせず、母国語でしっかりと考えさせ、自然との触れ合いの中で心身を鍛え、集団生活へ適応させることの方が重要である。

（3）小1プロブレム

今「小1プロブレム（問題）」という言葉が話題となっている。小学校に入学したばかりの児童が教師の話を落ち着いて聞けず、友達と騒いだり、教室を歩き回るなどして授業が成立しない問題である。

1994年頃から、「小1がおかしい」とあちらこちらでささやかれ始め、1997には一斉に吹き出してきた。1998年頃から、報道が小学校高学年の「学級崩壊」に集中したため、やや影が薄くなったが、その実態は余談を許さないものであった。

その原因は、決まり事の少ない伸び伸びとした保育園や幼稚園から、決まり事の多い小学校へと環境が急に変化して児童が戸惑ったり、親のしつけが行き届いていないことなどが挙げられている。それだけに保育士、幼稚園教諭、親は、子どもが小学校に入るまでに、「決まりを守る」といったしつけをしっかりしておかなければならない。

また、遊びの集団の中で仲間との葛藤を解決していく、対人スキルを身に付けていないため、「一人になる子どもが多い」ことも挙げられている。一人になる子どもは共感できないため、他人への迷惑行為に無頓着となる。対人スキルを身に付けさせるためには、子ども自身に、痛みを伴いながら気付かせることも大切である。

子どものけんかもすぐやめるのではなく、けんかの中で身体の痛みとともに心の痛みも十分に感じさせて、子ども自身に解決の仕方を学ばせていくことが、本物の協調性や社会性を育てていく。

(4)「子育てプロ」の育成

支援を控える（低温）ということは、放任するということではなく、いろいろな仕掛けをした上で支援を控えるのである。この仕掛けも大変だが、控えるのも辛抱がいる。

また、ぎりぎりまで我慢させるといっても、どこまでといった見極めが難しい。育苗では、「土の表面が乾いていても夕方になると葉先に水滴ができるうちは大丈夫。」といった状態を把握することである。かつては、祖父母や近所のおじさんおばさんが子育てを手伝い、若い夫婦は彼らの「見極めの技術」を学びながら、子育てプロに育って行った。しかし今日の日本では、そのような子育てプロを育てる良き慣習は失われている。

現在それが組織的にできる唯一の機関は、保育園や幼稚園であろう。だとしたら、保育園や幼稚園は、園児の両親を子育てプロに育てていく役目も負うことになる。

大変な苦労であるが、子どもの一生を左右するのであるから、やりがいのある責務であり、その使命感を持った保育士や教諭でなければならない。経験の少ない若手の保育士や教諭には重荷であるが、園長の強いリーダーシップの下、日々研修を積み、「自分も園児の両親と共に成長していくのだ。」という謙虚な姿勢があれば大丈夫である。ただその謙虚さの中に、これだけは譲れないという強い信念も必要である。その信念が両親を子育てプロに育てていく。

4．保育園の事例　（木更津社会館保育園）

保育園教育の事例として、千葉県にある「木更津社会館保育園」を紹介していくが、この園は先に述べた教育に最も当てはまる、いやそれ以上の事例である。

(1) 木更津社会館保育園の概要

千葉県木更津市は東京湾を挟んで羽田空港の真向かいにあり、人口約１２万人の中堅都市である。木更津社会館保育園の本園はＪＲ木更津駅から西方（海より）約１kmの町中にあり、生後３ヶ月から学齢前の幼児約１５０名を保育している。園長は真言宗の愛染院と自性院の住職を兼任する宮崎栄樹氏である。

宮崎氏は仏教に携わる者の役割として、子育て支援に力を注いでおり、当保育園の他に３つの地域子育てセンター「ゆりかごめ」と２つの学童保育所「ポプラクラブ」、さらには小学生を対象とした「土曜学校」を運営している。

地域子育てセンター「ゆりかごめ」は、「社会館保育園で培ったノウハウを広く地域の子育てに役立てよう。」という趣旨で出発したのであるが、今ではそのセンターに通っているお母さん達自身が、センターを核として子育ての輪を広げており、一昨年は３０００人参加の運動会「第１回木更津子ども祭り」を開いてしまった。そして昨年は４０００人が参加し、あわてた木更津市が、今年はその運動会に予算をつけたほどである。

リーダーの理想像は、仕掛けだけしておいて、後は参加者自身に「自分たちがしている」と感じさせることである。この感覚が大変なエネルギーが生み出し、輪が広がっていく。まさに宮崎園長はお母さん達を理想的な形で「子育てプロ」に育てているといえる。

そして、宮崎園長がこれら幼児教育に２５年間以上関わってきた中で、たどり着いたのが「森の保育園」である。「森の保育園」は１９９９年３月にスタートし、たまたま山寺の自性院に土地があったことから、２０００年に「森の家」を建設して活動の拠点とした。

２００２年には活動の拠点をさらに広げた。「森の家」の近くにあった江戸時代末期の民家と山林を譲り受け、民家は保育園向きにリフォームし、社会館保育園分園「佐平館」と名付けた。土蔵や馬小屋を出来るだけ生かした造りとなっている。周囲には竹林があり、タケノコ狩りや竹細工などに利用する。また

野菜やシイタケ作りもできる。さらに一昨年からは休耕田も借りている。

この「森の保育園」は、5歳児を中心に約60日実施しており、雨の日も寒い風の日も予定を変えることはない。当初、これほど長く「森の保育園」を行うことに保育士は不安を覚えたが、園長の「何をしても（何もしなくても）よいから、とにかく行って来なさい。」という言葉に送られて、しぶしぶ森に出かけた。しかし、案ずるより産むが安しで、子ども達自身が次から次へと遊びを発見していき、保育士の「何をやったらいいのだろう。」という不安を吹き飛ばした。

特に2003年から、千葉県庁の外郭団体職員である「森の天才」直井洋司氏が参加するようになってからは、保育士はさらにゆとりができ、子ども達もその活動の場を急速に広げていった。

（2）社会館保育園の一日

私は2006年6月15日（木）、7月19日（水）、7月20日（木）の3日間社会館保育園を訪れた。その内、前の2日（とびとび）は「森の保育園」で、最後の1日は町中の「本園」で過ごさせていただいた。次にその様子を紹介していく。

1）町の「本園」

①園庭

町中にある本園を訪問すると、まずその園庭に驚く。中央にはシャベルカーで園庭の土をかき集めて作った、高さ2mの小山がそびえ、それに大きな丸太が何本も突き刺さっている。（図1）　子ども達は、シャベルカーが掘った跡の水たまりで遊び、小山から転げ落ちている。

障害物が多すぎて、とても運動会など開けない園庭だと思ったが、運動会の最初に行われる種目が、お父さん達全員による、平らな園庭作りだという。お父さん達が汗水垂らながら、スコップで小山をみるみる平らにしていく姿は、子ども達に感動を与えるという。子ども達がお父さんを見直す場を巧みに演出している。

（図1）園庭の小山

午前中の散歩から帰ってきた子ども達は、昼食まで園内で自由に遊ぶが、その遊びが半端ではない。ゆりかごブランコは大きな水たまりの上に浮かんでいるし、その周りにはぶつかり防止の柵がない。見上げると屋根の上に子ども達がいっぱいる。（図2）　傾斜の急な滑り台で上り下りするのだが、滑り台の頂上から先は、よじ登ぼるしかない。落下防止の手すりはあるが、傾斜がきつく、大人でさえ足のすくむ高さである。

（図2）屋根の上の子ども達

園庭のやや端にそびえる大きな木は、登るための足場（高さ２ｍ）が組んであり、３ｍぐらいな高さに樹上小屋がある。またその足場から向かいのジャングルジム（高さ２ｍ）へ向けて、幅３０ｃｍ、長さ５ｍの作業板が渡してある。見ていると、そこを３歳児くらいの裸の女の子２人が両方から渡ってきた。（図３）　中央でにこにこしながらじゃんけんをし、負けた子は回れ右をして戻って行った。見ていた私の方が手に汗を握ったが、近くの保育士は平気である。

（図３）高さ２ｍの作業板

今年の４月に、この作業板から一人の子が落ちて骨折したが、そのときに保護者が発した言葉がなんと「お手数をおかけしました。」である。入園前にいくら「怪我はしますよ。それを覚悟で入園してください。」と言われていても、なかなか出る言葉ではない。社会館保育園の保育方針を信頼し、将来の成長した我が子を思い描けるからこそ言える言葉であろう。

また、たとえ親が文句を言ってきても、それで作業板をはずすほど宮崎園長は柔ではない。「リスクを背負わせることが、最高の安全教育である。」との哲学を持っている。ここが、保護者に責められるとすぐに止めてしまう、軟弱な教育者との違いである。ただし、作業板の下には小石一つないように、細心の注意をはらっている。

②０歳児の部屋

社会館保育園では０歳児（生後３ヶ月）からあずかっているが、この０歳児の部屋がまた半端でない。他園から研修に来ていた保育士が、「こんな０歳児の部屋は他園には絶対にない。」と教えてくれた。

のぞいてみると、部屋の中には高さ６０ cm の高床があり、数人の０歳児がその上ですやすやと眠っていた。床から高床に木製の斜面がかけてあり、斜面のないところは布団が敷いてある。（図４）

（図４）０歳児の部屋

見ていると、一人の０歳児がハイハイで下から登って行き、斜面の途中で立ち上がろうとしてバランスを崩した。斜面を転げ落ちて下の床板で頭をゴンと打ち、大きな声で鳴き出したが、保育士はあまりあわてた様子もなく、「痛かった、痛かった。」と頭をさすってやると、すぐに泣きやんだ。こうやって危険を体で覚えていくのあろう。

③リズム運動

社会館保育園ではリズム運動を取り入れている。リズムに合わせて動き、合図によって動物のまねをしたり、２人組や３人組になるというものだ。いろいろな組になる動作を繰

り返すことで、一人ひとりが全体を見て状況判断が出来るようになる。一人ぽつんとしている子どもを助けに行き、決して仲間はずれを作らない。

自由奔放に過ごしているように見えて、あちらこちらで互いにいたわる姿が伺える。その理由の一つがこのリズム運動であろう。

2）森の保育園

町中の「本園」も半端ではないが、「森の保育園」はさらにバージョンアップしているので、6月15日の取材を時系列でやや詳しく紹介していく。

①町の本園を出発

6月15日、8時30分頃から門の前にクジラ組（5歳児）の子ども達が集まり始め、8時40分に点呼開始。「しんたろー」,「ごろー」,「さとみー」,「まちゃー」,・・・、名字ではなく愛称で呼ぶ保育士の声に親しみを覚える。子ども全員を「～さん」と呼ぶ学校教育にふと疑問が湧く。リュックにも愛称とマークが縫いつけてあり、豚のマーク？をつけて平気な顔をしている。自然な感じで2人組ができ、園児28人が手をつないで8時50分いざ出発。この日の同行者は、同園の保育士2名と他園から研修に来ている保育士1名。そして同行を希望したお父さん1名と私である。同行を希望する保護者は前もって申し出れば自由に参加できる。

②途中の「森の家」につくまで

保育士は故意なのか、それともその方が安全なのか、2列通行がやっとの細い路地や、興味のわく道を通って行く。その都度子ども達は好奇心をむき出しにして、列が長くなってしまう。しかし、後れた子をもう一人が呼びに行き、2人組はちゃんと堅持している。

しばらく行くと、裸足に長靴だから靴擦れをして、保育士からカットバンもらう子も出てくる。しかし、路肩に腰掛けて一人で貼っている。保育士はとにかく手を貸さない。

町外れに来たとき、前から目をむきながらやって来る2人の婦人と出会った。最後尾で責任者らしくみえた私に、「棒を持って隣の子をこづいているのに、そばの先生は何も言わない。親が見たら怒鳴ってくるよ。」と大声で忠告してくれた。しかし、「そうですか。」と言って何もしようとしない私を見て、「何という保育園なんでしょうね。」とあきれながら去っていった。私は、取材中は何もしないと決めていた。

宮崎園長はけんかを公認している。人間の感情は理屈では解決しないことが多く、ぶつかり合って解決することも必要である。けんかを途中で止めると遺恨だけが残り、根本的な解決にならない。また公認することで自分たちで解決するスキルも覚えていく。なるほど、以後何回かけんかの場面に出くわしたが、仲直りが早く、後に遺恨を残さない。

森が近づくにつれて、後方の子ども達は道ばたで鞭になる植物や綿帽子のタンポポ、昆虫などを見つけては立ち止まり、遅れることをいっこうに気にしない。森に入るといきなり急な細い山道に遭遇した。心配をよそに、子ども達はいとも簡単に登っていく。驚くほどの体力である。（図5）

（図5）森の入り口

9時50分、自性院のすぐ上にある「森の家」に到着。「森の家」では2人の婦人が竹箒を持って落ち葉を集め、たき火をしていた。この2人は、地域子育てセンター「ゆりかごめ」に通っているお母さん達で、この「森の家」を利用させてもらっていることから、自主的に当番を決めて掃除をしているのだ。2人とも良い笑顔で子ども達を迎えてくれた。森はみんなを優しくする。

②分園「佐平館」まで

「森の家」の横の広場には「森の天才」直井洋司氏が待っていた。直井氏は猿の研究者で森のことなら何でも知っている。

直井氏は少し待ちくたびれた様子で、「遅いぞ。」といいながら今日の予定を連絡し、そこからは直井氏が先導する。途中で直井氏の説明を聞きたい子は直井氏について行くし、自分で探索したい子は、タケノコをとったり、ミミズをつまんだりと、しだいに後れていく。

細い畦道を進むときは、畑を耕しているお百姓さんの厳しい目がそそがれる。子ども達は里山に入ると、けして大きな声をだしたり、山の崖や畑の畦を崩すようなことはしない。これが「里山の掟」であり、何度もしかられながら厳しくしつけられる。このことがスズメバチやマムシとの共存も可能にしている。逆に「里山の掟」を破ると大変な自然罰が下ることを子ども達は肌で感じている。このようにして、「約束事は守る」しつけが自然になされていく。

しばらく行くと民家の庭先に出た。その家の主人がにこにこしながら、庭に植わっているビワの木から、実をとって子ども達に与えてくれた。子ども達はミミズをつまんだ手で皮をむき、おいしそうに食べている。年中裸足で、適度な不衛生が免疫力を向上させているのだろう、病気はほとんどしない。

落ち葉が厚く積もった急な下り坂にさしかかった時、急に直井氏が「走れー」と号令。全員が全速力で駆け下りる。30m先は左に急カーブしているが、それも走って通り抜ける。一人もころばないし、大変な脚力である。

4)「佐平館」へ到着

10時20分、社会館保育園分園の「佐平館」(図6)に到着する。

(図6)森の分園「佐平館」

到着して荷物を佐平館の縁側に並べるやいなや、リヤカーに乗ったり、木につるした長いブランコに向かったり、庭の小さな池に駆け寄って魚や水中昆虫を探したりと、様々な方向へ散っていく。ぼんやりしているものは一人もいない。ブランコは大きな木の枝から下げた長さ10mと5mものが2つある。乗るのに先を争ってはいるが、不思議と取り合いにはならない。(図7)

(図7)特大ブランコ

直井氏があまり大きな声を出さずに、「集まれー。」と言うと、「おい、集まれだって。」とあちらこちらの子どもにさざ波のように伝わっていく。子ども達は自由にしているが、大人との距離を測りながら過ごしている。

直井氏が、「今日はやって来るのが遅かったので、田んぼに入る時間が短かくなった。希望者だけにするから、田んぼに入りたいものは裸になってきなさい。」と声をかけると、１０人ほどの子どもが裸で、他の子どもはそのまま集合した。いろんなことをいっぱいさせたい直井氏と、時間を気にせずゆったりと過ごさせたい園長のとの間で、このことだけは少しズレがあるようだ。

直井氏は「これから田んぼに行くが、網は前回きちんと返さなかったので、今日は貸さない。」ときっぱり言う。残念そうにはしているが、不思議と子ども達からは不平が出ない。指導者に、約束はきちっと守らせようとする強い姿勢が見えるし、子ども達も前回の責任を素直に認めている様子が伺えた。なんとなくさわやかな雰囲気である。

⑤泥遊び

１０時４０分に「佐平館」を出発し、１０分ほどかけて３００m離れた田んぼに到着。田んぼは自性院の檀家から借りている休耕田で、かなり広い。一面に水が張ってあり、その向こうには葦の生えた湿地がある。

裸組１０人に加えて、服を着た８人も長靴で田んぼに入って、田んぼや湿地の生き物を追いかけ始めた。残りの１０人は田んぼの周りで、花やツタでリースを作ったり、タケノコや虫を捕って遊んでいる。何をしても自由だが、ぼけーっとしている子どもはいない。直井氏や保育士もゆったりと楽しんでいるように見える。

裸の子どもも、最初は田んぼの中で虫を探して遊んでいたが、しばらくして保育士の一人が男の子に泥をかけて挑発すると、その男の子は意地になって保育士を追いかけ、やがてあちらこちらで泥の掛け合いが始まった。そのうちに全員が頭から泥だらけになり、半端でない豪快な泥遊びとなった。（図８）　長年耕されてきた田んぼの泥は、きめがとても細かくて気持ちが良いという。

（図８）半端でない泥遊び

１１時３０分、田んぼから出て「佐平館」へ向かうが、子ども達は帰る途中も生き物探しを止めない。やがて、泥だらけになった子は、きれいな水の田んぼに入り、互いに泥落としをする。これも楽しそうだ。「佐平館」にもどると、保育士が順番にホースで水を頭からかけてやり、さっぱりする。

⑥昼食とその後のひととき

１２時、昼食の開始。社会館保育園から調理師がワゴン車でおかずやフルーツを運んできて待っていた。ご飯だけは子ども達が各自で持ってきており、保護者にも保護者の役割を果たすようにしている。

保育士の手を借りず、おかずやフルーツは各自が自分の皿についでいく。つぎ方が実にうまく、順番を守ってトラブルが起きない。食後の牛乳も、各自で適量を自分のコップについで持って行く。私もおにぎりを用意していたが、おかずをいただいてそのおいしさに満足した。

１２時３０分、保育士の一人が「畑に収穫に行きたいものは集まれー。」と声をかけると１３人が集合し、３００m離れた畑に収穫に行く。大きな収穫かごを１つ用意し、希望した男の子が背負って出発。

途中、かごを背負った男の子がそのまま木に登り、枝に引っかかって降りられなくなった。(図９)　しかし保育士は見ているだけで手を貸そうとしないし、その子もけして助けてくれとは言わない。５分ほど格闘して、かごをかけたままで降りてきた。

(図９) かごをかけて木登り

さらに進むと、地域子育てセンター「ゆりかごめ」のお母さん達とその子どもの集団２０人とすれ違う。本当に、森ではみんな明るい顔をしている。

やがて、自分たちが植えたピーマンや大根を収穫して帰る。今日は収穫が少なかったようだ。途中、段々畑の畦道（下の畑から３m）で一人の女の子がその急な斜面にきれいな花を見つけた。半分身を乗り出しながら取ろうとしている。普通の指導者なら飛んできて「危ないから止めなさい。」とどなりつけるだろうが、ここではみんな平気な顔をしている。

⑦草取り

収穫に行った保育士から、「畑に草がいっぱいはえている。」との報告を受けた直井氏は、「畑に草取りに行くから、みんな集まれー。」と声をかけた。子ども達も草取りに行くのをいやがっている様子はない。楽しい収穫のためには草取りが必要であることをよく知っているのだろう。

１３時２０分、全員で畑の草取りに出発。少し高台にある「佐平館」からは、下へ降りる普通の道もあるのだが、子どもの多くはわざと危険な崖から降りていく。(図 10)

(図 10) 崖から降りる

畑に到着すると、さっそく草取りを開始した。中には花摘みに夢中の女の子もいるし、遊んでいるのか草取りをしているのかよくわからなかったが、終了して一カ所に集めて見ると、驚くほどの草を刈っていた。

草取りをした畑の隣には土曜学校の畑が広がっている。１３時５５分、今度はそこに移動して、直井氏による野菜や草花の勉強が始まった。子ども達は、先輩達が作った畑を前にして、興味深そうに直井氏の話を聞いている。

帰りのコースがまた半端ではない。とんでもない急傾斜の森の中を通る。人道というよりは獣道に近いもので、いばらがからみつき、大丈夫だろうかとつい心配してしまうが、みんな平気である。森の中には、土曜学校の生徒達が作った隠れ家があちらこちらに散らばっていた。

森から出たところに、田植えをしてまもない、保育園と土曜学校の田んぼがあった。保育園の田植えは、お世辞にもうまいとは言えないが、愛嬌がある。土曜学校の方はさすがで、まがりなりにも苗がまっすぐ並んでいる。最初は「不耕起栽培」を目指したそうだが、除草剤を使用しないことから、雑草にやられてしまい、今では耕していると言う。

「不耕起栽培」の最大の敵は雑草であり、開発者の岩澤氏でさえ、「冬季湛水」の技法が完成するまでは雑草に悩まされた。

（図 11）たき火の炭で

⑧仕掛けと野菜炒め

１４時３０分、直井氏がザリガニ取りの仕掛けを説明してから、小川へ仕掛けに出発した。出発するやいなや、にわか雨が降り始めたので、私は佐平館へ駆け戻ったが、みんな平気な顔をしてそのまま出かけていった。

１５時、今日収穫したピーマンと大根を自分達で刻む。実に包丁さばきがうまい。庭では保育士が子ども達と火おこしにチャレンジしている。紙を使わず自然のものだけでたき火をするのも「里山の掟」である。

２人の子が吹き竹を使って頑張った。自然のものだけで容易に火がつくものではないが、保育士の巧みな指導で燃え上がった。保育士がフライパンを火にかけて、ピーマンを油で炒めてやる。ここだけは保育士の役目らしい。自分たちが収穫した味は格別で、子ども達はピーマンを何度もおかわりしていた。

たき火跡の炭も無駄にはしない。直井氏や保育士が炭を手にとって、子ども達の顔にひげを書いてやる。みんな楽しそうで、良い顔をしている。（図 11）

⑨帰園

１６時、「佐平館」を出発。２０分ほど歩いて自性院に到着。自性院の山門には直井氏がマイクロバスを用意しており、子ども達を乗せて本園まで２往復する。

本園に帰ると、疲れた様子もみせず、園庭や校舎内をかけずり回る。この間、保育士は今日の出来事を庭先の小黒板に書き、保護者のお迎えに合わせる。

通信もＢ５版のものを毎日、Ｂ４版を週に１度出して、園の様子を細かく保護者に知らせている。

３）雨の「佐平館」

①佐平館内での活動

７月１９日、１３時　「佐平館」に到着すると、雨なので全員「佐平館」の中で活動していた。懐かしい顔ぶれであり、一部の子は私を覚えていた。「佐平館」の中にはいろいろな仕掛けがあり、雨の日だけ「佐平館」の中に入れるので、雨もまた楽しいようだ。むしろ「森の天才」直井氏の方が寂しそうにしていた。

訪れたときは、５人ほどの班（全６班）に分かれて、竹と和紙で灯籠を作っていた。中のろうそく立ては各自が丸竹を切って磨き、周りの和紙は、今日は１枚だけ、みんなで色塗りをして作成していた。和紙もやがては各自で作成するのだという。完成した和紙の絵は、暗くした隣の部屋に持って行き、実際にろうそくを入れてみる。暗闇でぼんやりと輝く灯籠の美しさに子ども達は満足している。

完成した班から順に隣の部屋へ移動させる

のだが、やはり保育士があまり大声を出さなくても、「3班集合！」と言えば、その指示が子ども達の間を「3班集合だよ！」とさざ波のように伝わっていく。

ろうそく立てにする竹の直径は7 cm ほどもあり、あまり切れない鋸を使用するため（図12）、何人かは手や足の指を引いていた。しかし大騒ぎもせず、自分で傷口を洗いに行き、保育士からもらったカットバンを貼っていた。（図13）

（図12）竹引き

（図13）傷口を洗う

②屋根裏

その後はしばらく自由時間であったが、この時間がまたすざまじい。「佐平館」の屋根裏は、子ども達が遊べるように改造しており、上り下りの簡単な梯子もあるが、梯子を使う者は一人もいない。子ども達は次々に太い大黒柱をよじ登り、梁に手をかけ、足をかけてよじ登っていく。（図14）　全員が、鉄棒の逆上がりやうんていができるようになって卒園していくことが信じられた瞬間である。

（図14）柱を登って屋根裏へ

屋根裏の暗闇には般若の面がおいてあり、子ども達も「こわいんだよ。」と言っていたが、どことなく楽しそうである。また屋根裏からは、梁にぶら下がって降りてくる。（図15）

（図15）降りるときも

私は気がつかなかったが、下を歩いていた女の子の上に、屋根裏から女の子が降ってきた。下敷きになった子は泣き出し、降ってきた子もすまなさそうにしている。保育士もや

ってきて、下敷きになった女の子の様子を見ていたが、たいしたことはなく、やがて元気に遊んでいた。保育士から注意も受けたが、それ以上に、互いに身体で学んでいくことの方が多い。

逆さブリッジなどお手の物で、一人がやっていたので、「みんなもできるの？」と聞くと、「簡単だよ。」とやってくれた。（図 16）

（図 16）簡単だよ

4）園長との懇談

7月20日は宮崎園長と懇談した。園長は「森の保育園」を始めて、25年間思い描いてきた保育にやっと近づいたと言う。

「森の保育園」は、広い濡れ縁の他に特別のいすや机もない。十分すぎる空間とユッタリとした時間の中で、保育士の目が完璧に届くわけではない。子ども達は保育士との距離を自分で測りながら、時に一人で、時に仲間と共に生活し、遊び、里山の自然を堪能する。心身が活性化され、注意力が敏感になる。一人ひとりが独自であることが公認されて、自信が深まり、臨機応変の連帯行動が出来るようになる。

人に優しくなり、時に自己犠牲的な行動を取ることがあり、大人を感動させる。最初は心配した保護者も、森から帰ってきた我が子を見て、「素直になった。」と喜んだ。子どもに限らず、森は人間を優しくするようだ。

保育士達も当初、「本園でいっぱいすることがあるのに、森に行きすぎではないか。」と不満を漏らしたが、今では運動会をはじめ、いろいろな準備が短くてすむようになり、逆にいっぱい時間ができた。

「里山の掟」は全ての子どもが守る。自分だけのことを考えることが許されない。集団的な連携が不可欠であり、自分勝手は全体を危うくする。1人ひとりがお互いに仲間を守り仲間を助けて森を行く。小川に遊ぶ。クワガタを捕る。アケビをとり野蒜を食べる。

日本では親が「けがをさせないで。」「蚊にもさせないで。」と要求するが、それでは安全教育はできない。子どもの将来を見通せる者が、本当の安全教育を親に知らせる義務がある。入園の日から事あるたびに、「怪我をして帰っても責めないでほしい。」と言っている。

リスクを背負わすことで、自分で状況判断が出来るようになる。宮崎園長が目指すのは、監督の意志で動く野球人間よりも、自分で状況判断をするサッカー人間である。

ただ小学校に上がってからも、自分で状況判断をしてしまい、トラブルが発生することもある。授業中、すっと立ってトイレに行くことなどがこれに当たる。しかし、授業中に意味もなく立ち歩いて、教師に迷惑をかけることはない。子どもなりに、今何をすべきかを判断しているのだ。

運動面でも並外れており、卒園までに全員がうんていや鉄棒の逆上がりができる。最初はやれない子どもも多く、その子達は逃げる。もちろんその気持ちは認めるが、だんだんと他の子どもが出来るようになり、出来た順に名前を書き出していくと、やはり自尊心があるので、やれるようになりたいと心の底から思うようになる。ここが指導者としての腕の見せ所である。

努力をして何とか出来るようになる。出来

た瞬間本人も親も泣く。その一瞬は永遠の思い出になる。出来なかった自分が出来るようになる。最大の満足感であり自信につながりる。運動会でのうんてい競技は、泣きながら最後までやり抜く子ども達の姿に、見守る親も感動する。「出来た瞬間に見せる子どもの笑顔は最高ですよ。」

宮崎園長は、同姓のよしみではないだろうが、映画監督宮崎駿氏を尊敬しており、宮崎監督がその著書「虫眼とあに目」(徳間書店)で示した、次の「現代日本の保育園が備えるべき特徴」を大切にしている。

①子どもは夢中で食べる。
②全身全霊で遊んでしまう。
③大人は手と口を出すな。
④何でもバリアフリーにすると子どもは老化する。
⑤危なくしないと子どもは育たない。
⑥教えるべきはきちんと教えよ。子どもは守る。

ある保育士は「多忙で、あまり園に来ない園長なのに、やって来ると子ども達が『園長！』、『園長！』とまぶれつく。」(図 17) とうらやましそうに語った。子ども達は、無意識に、園長の大きさに気がついているのだろう。

(図 17) 園長と子ども達

5．終わりに

思えば、「森の保育園」はどこにでもあった昔の日本の姿である。みんな野山をかけずり回り、農家の人に怒られて、貧しかったが、心や身体は元気だった。多くの教育者は「昔は良かった。」と嘆くだけで、「再現はとてもできない。」と諦めている。

しかし、ルネッサンスのように、良いことは復活すべきである。宮崎園長は、リーダーの強い信念さえあれば、当時を凌ぐスケールで実現可能であることを示してくれた。幸いにして？　山村では空き家や放置された田畑がいっぱいある。単独でできなければ、県や市に働きかければよい。千葉県ではすでに、平成１５年５月に条例を施行して、「新たな里山の活用」を進めている。

ただ、桜美林大学名誉教授の三島次郎氏の「帰っておいで、ホタル」論ではないが、上辺だけの里山体験では、本物の「蛍の里」にはならない。せめて、年間３０日以上を里山で過ごさせたいものである。

最後に、私は「教育は、一部のカリスマ教師にしかできない指導法を全教師に要求してはいけない。」と思っている。もちろん教師の資質を高めることは必要であるが、全教師をカリスマにすることは不可能である。だとしたら、どの教師が取り組んでも効果がある方法でなければならない。

文部科学省、教育委員会、校園長の役割は、全教師に教育の方向性をしっかりと示し、全教師が取り組める内容で、ただし仕掛けだけはでっかく、保護者やマスコミからの苦言にはたじろがず、「責任は私が取るから、やれ！」と言うことであろう。